

報告

幼稚園における保育実践

～自然環境を通して～

川崎 徳子

A practice of Education at Kindergarten

～ taking advantage of the natural environment ～

by

Tokuko KAWASAKI

～はじめに～

学校教育法第三章 幼稚園第二十二条⁽¹⁾には「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」とある。同第二十三条には「幼稚園における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。」とあり、五つの目標が記されている。五つの目標は、幼児の成長にとって大切なものであり、相互に関連し合っている。

幼児にとっての適当な環境とは、人的環境、物的環境、自然・社会環境などを指す。幼児の周りにあるものすべてが大切な環境と言える。幼児は五感（視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚）のすべてを働かせ、その環境を取り入れ、成長していく。この直接体験が必要なのである。レイチェル・カーソン⁽²⁾は著書の中で、直接体験の重要性や素晴らしさを述べている。教師は幼児に様々な体験を用意し、共に活動を楽しみ、喜び、不思議さを感じることで、幼児に心地よさを感じさせ、心身の成長を促していくという役目をもつ。

学校教育法第二十三条の五つの目標のうち、目標三には、「身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。」と掲げられており、自然環境を身近に感じることで、幼児の成長が促されるのである。

実際、幼稚園での生活において身近に触れる花や生き物の成長・変化が幼児に感動を

受理日：令和3年10月27日

純真短期大学特任教授

与え、大きな学びとなる。幼児のもっと知りたいという意欲を育てていくために、教師は直接的、間接的な方法で、環境を整えていく。

また、家庭との連携も大切で、幼稚園での経験を家庭で話題にし、家族で喜んだり、再現したりしてもらうことで、幼児の生活がますます豊かで充実したものになっていく。

本報告では、幼稚園での「自然と触れ合う体験」の取り組みのいくつかを、実践事例として報告する。これらの事例を保育者養成校での授業に取り入れることは、学生の学ぶ意欲や保育者としての意識と誇りを高めていくものと考えられる。

【園外での自然に触れる活動】

事例 1 公園への散歩（花摘み、水遊び、虫捕り、木の実・木の葉集めなど）

幼稚園では、教育課程や指導計画、年間計画の中に、自然と触れ合う経験を組み込んでいく。その活動は、「楽しかった」「おもしろかった」という感動体験にはなるが、興味の持続性や深まりまで至らないことが多い。幼児に楽しさを持続させ、自ら考えたり工夫したり、発見させたりする深まりを与えたいと考え、歩いて30分ほどの、那珂川のほとりの公園への散歩を、継続的に行った。幼児は、広い中州を走り回り、木の実や木の葉で様々な遊びを発明し、木登りをしたり、木の枝を集めては様々な物を作ったりして遊んでいた。

幼児は木の上で「お家ごっこ」を始め、家族の役割分担が生まれた。また、落ち葉を踏む音も良い刺激となり、「カサカサ」「ザクザク」などの音の違いを楽しんでみたり、落ち葉を投げては雨のように降らせてみたり、大岩に落ち葉を敷き、ベッドを作ってみたりと、発想はどんどん広がった。教師が仲間に入ると、幼児の活動はさらにダイナミックになった。

中州に行くには、橋と飛び石を使う方法があり、教師は敢えて安全な橋を選ばず、飛び石に幼児を誘う。はじめは怖がっているが、何度も挑戦するうちに、幼児は進んで渡るようになる。教師には意図があり、幼児の挑戦意欲を掻き立てようとする。

また、水量は、季節や天候により変化し、幼児にいろいろな発見や気づきを与えることができる。同じ場所に行くことで、幼児はどこに何があるかを把握し、思い切り遊ぶようになる。自然の中の風、水、草花、木々等のわずかな変化にも敏感に気付くようになる。幼児は何度行っても、「今度はいつ（行くの）？」「公園で〇〇をしよう！」と、散歩を心待ちにするようになる。

持ち帰った木の枝や草、木の葉は、図鑑で調べたり、大きさや種類などを比べたり、並べたり、分類したりして楽しむ。松ぼっくりやどんぐりを使った制作も盛んに行う。お家ごっこの材料や劇遊びの小道具にもなり、ますます幼児の創造力を育んでいくこととなる。

事例 2 おたまじゃくし捕り

幼稚園の周りは田や畑で、幼児は毎日保育室から眺めることができる。園にいながら、野山の季節の変化が感じられる。春には畑が耕され、水が入り、稲の苗が植えられ

る。苗が伸び始める頃、幼児は思い思いに空き容器や飼育ケースを持ち、田の畔まで行く。おたまじゃくしを捕り始めるのである。年長児は昨年の経験があり、おたまじゃくしを素早くすくう。年中児は憧れの目で見ています。年長児は昨年自分達がしてもらったように、おたまじゃくしをすくっては年中児の容器に入れている。教師は毎週幼児を田んぼに連れていく。年中児はみるみる上達し、年長児の技に近づく。そのうちにおたまじゃくしは成長し、足や手が生え、カエルになる。おたまじゃくしからは想像できない、カエルの姿への変化も、幼児に大きな驚きを与える。

隣接する田んぼからは、たくさんの小さなアマガエルが幼稚園の庭にやってくる。幼児は教師と一緒に、おたまじゃくしやカエルを育てていく。時には上手に世話ができず、生き物を弱らせたり、死なせたり、干からびさせてしまうこともある。幼児はひどく悲しむが、「生き物には命がある」ことや「その大切な命をどうすればよかったか」などを考える機会になり、「今度は上手に飼おう。」「〇〇すれば良かったね。」「カエルが元気なうちに逃がそう。」などの言葉が聞かれるようになる。カエルのお墓を作ったり、その上に石を乗せたり、花を飾ったりと、幼児なりに皆で一生懸命に考えて取り組む。家庭で生き物を飼うことが少ない幼児には、貴重な経験である。

事例3 彼岸花を探しに！

自然は刻々と変化する。幼児が感動体験を味わえるよう、教師は十分な準備をする必要がある。幼稚園の近くでは、彼岸花の咲く期間は、9月中旬の1週間ほどで、枯れ始めるのも早い。教師は一番美しい景色を幼児に見せるために、柔軟に散歩を組み込んでいく。田んぼや畑の周りに燃えるように赤く咲く花を見た幼児は、歓声をあげて喜ぶ。心を揺さぶられ、感動を味わい、美しいものへの興味や関心、感覚が育まれていくのである。その幼児の姿に、教師も感動と充実感を覚える。

事例4 年長児の山登り(成竹山登山)

幼稚園では、年長児が毎年山登りに取り組んでいる。幼稚園から臨む成竹山は、四季折々に季節を感じさせてくれており、幼児にも身近な存在である。その山を実際に歩く。登山口まではバスで行き、そこから1時間ほど歩いて登る。教師は登山の為に、下見を含め周到な計画を立て、いろいろな場面を想定しながら、準備を進めていく。幼児の歩く速さや疲れ具合、休憩地点の決定、登山の間に幼児が目にするもの等を考えておく。登る途中で発見する花々や木の実、中腹にある大きな岩、木々の間から見える景色、山頂から眺める広い平野や海など、幼児を感動させるものがたくさんある。年長児は教師から話を聞いたり、一緒に準備を進めたりすることで、登山への意欲を高めていく。持ち物の準備も自分で行き、成長・自立に向けた取り組みが始まる。成竹山は少々幼児には険しいが、年中児が作ってくれたキーホルダーや保護者からの励ましの声が、年長児に登る力を与えている。登らなければ見られない、頂上から一面に広がる景色は素晴らしく、年長児の大きな感動体験となる。幼稚園や小学校、自分たちの家を懸命に探す姿もある。年中児は、園庭に出て、山頂の年長児の姿を見つけると、声をあげて喜んでいる。そして恒例の鏡の交信が始まるのである。太陽にキラキラと輝く光は、まる

で魔法のようだ。各家庭からの保護者の光も加わり、更に感動は増していく。下山も楽しい。一度歩いたことは年長児に見通しを与え、周りを見渡す余裕が生まれる。「年中さんにお土産！」と花や木の実、野イチゴを探す姿もある。この登山の経験が年長児の達成感や充実感となる。「登山ができたから、何でもできる。」と、その後の活動にも意欲的になり、進んで挑戦するようになっていく。年中児は、年長児の頑張る姿にますます憧れ、「年長さんになったら成竹山に登るんだ。」と、進級を楽しみにするようになる。幼児には活動で自信を持たせていくことが大切だが、「少し頑張るとやり遂げられる」課題を設定することで、達成感や充実感が味わえ、一層の成長に繋がっていくと考える。

【園内での自然に触れる活動】

事例5 栽培活動

幼稚園では教師は栽培年間計画を作成し、それに沿って活動を進めていく。計画を基本としながら、気候や幼児の実態等に合わせて栽培物を取捨選択し、改善・工夫をしていく。

栽培活動では、幼児に無理のない活動計画を立て、幼児の興味や関心を大切に育てていきたいと考える。教師には基本的な栽培知識が必要であり、教師集団としての綿密な計画・準備が求められる。「種まき」という活動のみに終わらせず、教師の豊かな話や写真、図鑑の提示などから、幼児に栽培物への興味や関心をもたせたり、栽培物の成長に見通しをもたせたりしていくのである。

幼稚園が田や畑に囲まれていることも、恵まれた環境である。園内に畑を作れるのは大きな利点で、毎日幼児に声かけを行い、栽培物の成長や変化に気付かせることができ、世話をする楽しさも伝えられる。幼児の動線を意識し、花や野菜の成長がいつでも目に触れられるように、正門から保育室までの通路、保育室前にプランターや鉢を置くと、幼児の関心は高まり、送迎する保護者の関心をも引き出すことができた。幼児手作りの名札も効果を発揮し、一層自分の栽培物への愛着が増した。少しのきっかけ作りで、幼児の意欲を掻き立てられるので、教師は常に創意・工夫することが大切だと痛感した。また、園の置かれている環境により、栽培条件は様々であり、栽培活動に可能な形を独自に工夫していく必要がある。園内に畑が作れないのであれば、プランターや植木鉢、布袋等が活用できる。また近くに畑を借りることもできる。その場合は、教師が意識して畑に導くなど、折々に成長していく姿を見せる必要がある。

幼児の興味を引き出すために、絵本や図鑑も大きな力となる。「年少版こどものとも チューリップ」⁽³⁾「チューリップ きゅうこんとたね かがくのとも」⁽⁴⁾「ヒヤシンス かがくのとも」⁽⁵⁾「たんぼぼ かがくのとも」⁽⁶⁾などは植物の成長の姿が丁寧に描かれ、文章も幼児に分かりやすく、幼児の興味に広がりをもたせることができ、指導に役立つ。これらの本は幼児に「小さな種や丸い球根から大きな葉や花が育つ」という、植物の不思議さを感じさせ、成長に見通しをもたせてくれる。

本学の授業では、今までの幼稚園での栽培経験を基に、学生用に資料を作成し、授業で活用している。〈資料1〉学生は興味を示し、実際に栽培活動を経験していく。

事例6 野草摘み

幼児が心待ちにしている春の訪れ（風の暖かさ、花の香り、野鳥のさえずり等）を、園内でも様々に感じ取ることができる。幼児は園庭で、草木の芽吹き、冬ごもりから出てきた虫の姿など、いろいろな発見をする。冬には草が枯れ何も生えていなかった場所に、ふきのとうやつくし、スギナが可愛い姿を見せる。年長児は前年の経験から、つくしをたくさん摘んで、職員室に「お料理してください。」と持ってくる。教師が「卵とじ」や「グラッセ（砂糖漬け）」などに調理してくれることを知っているからである。自分たちの収穫したものを美味しく味わう体験が、収穫の楽しさを倍増させ、身近にある自然への関心が高まる。「スギナ」や「よもぎ」の若葉を乾燥させて冷凍し、お茶づくりも楽しむ。幼稚園では、このお茶は1年中幼児や保護者、来客に提供される。保護者の食育への啓発にも一役買い、家庭で野草料理や薬草茶を作るきっかけ作りにもなっている。「つくしかがくのとも」⁽⁷⁾の絵本にも、成長が丁寧に描かれているので、この時期に活用し、幼児の植物への興味をさらに引き出している。

事例7 さつまいの苗植え～収穫

6月初めに、幼児と一緒にさつまいの苗を植える。「太陽に向かって苗が同じ方向を向くこと」「苗の間隔（あいだ）を十分に空けること」等を伝え、皆で楽しみながら植えていく。苗を植えた後の水やりも重要である。教師は毎日幼児に声をかけながら、苗の世話をするのを見守る。学年の発達に合わせた畑づくりも大切である。行動範囲が狭い年少児には、保育室の前のプランターで育てて、いつでも観察できるようにする。栽培経験がある年中児や年長児は、畑を耕すことから楽しむ。植物の小さな成長や変化にも幼児が気づけるよう、教師は言葉かけを行っていく。幼児は夏には畑に生えた草を抜き、「芋のつる返し」をする。そして芋の成長を見守りながら、10月の収穫を楽しみに待つ。幼児は、自分達で育てたさつまいに愛着を感じていく。収穫前には、長く伸びた芋のつるを切り、煮物にしてもらい、頂く。幼児はさつまいの香りに気づき、喜んで食べている。嗅覚や味覚が刺激される。幼児に芋づるを持ち帰らせると、保護者からも、「初めて食べました。」「美味しかった。」という反応が返ってくる。保護者にとっても、我が子が育てた芋づるの味はひとしおなのである。近年の幼児の食事は、家で調理したものが少なくなっているため、保護者に調理法を知らせる良い機会にもなる。

前日に芋のつる切りを終え、ようやく芋掘りである。幼児は夢中になって、畑の土を掘っていく。スコップではなく、自分の手で掘ることで、土の感覚を味わうことができる。幼児は自分で掘り出したさつまいに歓声をあげる。掘った芋づるも遊ぶ道具になる。芋づるの縄跳びや電車ごっこを、しばらくの間楽しんでいる。「土」や「芋の汁」が手につくと、なかなか取れないことを経験し、幼児は一生懸命に手を洗う。この体験が大切なのである。収穫したさつまいの山の前では、幼児は大きいものも小さいものも、大事そうに数えていく。数が増えるにつれて、皆の声は大きくリズムカルになり、揃っていく。楽しさを共有しているのだ。それから大きさ比べが始まる。まさしく、「数量・図形への関心・感覚」が育っている。

収穫したさつま芋は分け合い、同じ数だけ各家庭に持ち帰る。幼児は「お土産」という言葉にわくわくしている。翌日には、家庭でどんな料理にしてもらったのかを話し合う。教師は保護者に事前に調理の協力を依頼しておき、寂しい思いをする子がいないように配慮する。幼児にとって楽しい活動であり、いろいろな料理を知る良い機会にもなる。園でも毎日のように芋ぜんざいや芋団子汁、みそ汁などの料理を用意し、豊かな食体験ができるようにしていく。制作にも活用し、幼児はさつま芋を動物等に見立てて作ったり、室内を飾ったりしていく。この6月から12月までの半年間、継続して観察や世話に関わることで、幼児は「さつま芋」の成長から収穫までを、十分に楽しむことができる。収穫前後には、保育実践から生まれた「おおきなおおきなおいも」⁽⁸⁾の絵本を用意する。幼児は空想の世界に浸りながら、友達と一緒に創造力を働かせ、劇遊び等の様々な活動に広げていく。

「自分たちで栽培したものを食べる」という体験は、幼児にとって、もっとも理解しやすく、楽しい活動である。苦手な食べ物がある幼児も、「自分で育てた」ことや「皆と一緒に食べた」体験に勇気を得て、がんばって食べようとする姿が見られるようになる。

～終わりに～

いくつかの実践例を報告したが、幼児は幼稚園での自然と接する活動の中で、喜んだり、悲しんだり、不思議に思ったり、発見したりと、心ゆさぶられる経験をたくさんすることで、感性豊かに成長していく。新たな体験や繰り返し行う経験が、幼児の成長を促し、感動する心は深まりを見せていく。実践の中では、生き生きと活動する幼児の姿が見られた。レイチェル・カーソンは、「子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。」と述べている。⁽²⁾教師は様々な感動体験を用意することで、幼児の持つ種が大きく育つよう、援助いかなければならない。教師が幼稚園において、園内外の身近な自然に触れる様々な環境を幼児に用意することは、幼児の感性を育むために大切であり、教師自身も常に感性豊かであり、美しいものに感動する感覚を研ぎ澄ましておかなければならない。幼児の育ちを支えながらも、実は教師は自身の感覚を学び直しているのである。幼児の発想や考え、つぶやきを大切にし、日々の話題の中に取り上げ、周りの幼児にも広げていくことは、幼児に良い影響を与え、ますます「したい。」「やりたい。」「なぜだろう?」「どうして?」という意欲や探求心を育てていく。また、幼児は周りの友だちにも大きな刺激を与えていき、互いに育ち合っていく。教師は決して幼児をリードし過ぎず、見守り、適切な言葉かけや援助を行わなければならない。そして、教師自身、喜び、楽しみ、時には悲しむ姿を見せることも大切である。一つを例にとれば、教師も実際にツマグロヒョウモンやキアゲハ等の幼虫を羽化に至るまで育て、自然の力や不思議さを目の当たりにし、感動体験を味わってほしいと考える。

教師は十分に話し合いを行い、取り組みや育てたい姿などの思いを共有し、自然との出会いの機会を逃さず、幼児が自然の中で心豊かに成長していける環境を整えていきたい。

学生にも、授業の中で、これらの実践例を説明し、実際に栽培体験をさせ、成長を見せている。また、りんご毒蛾の写真やツマグロヒョウモンの成長を撮影したDVDなどは、自然環境が幼児に与える影響の大切さを学生に理解させるのに役立っている。授業の振り返りの中でも、学生は「苦手だった虫などの小動物に触れる勇気を持ちたい」「虫は苦手だが、少なくとも幼児に肯定的な言葉かけをしたい」等の思いを表してくれるようになり、実践事例や資料を「就職後に活用したい」と記述している。今後も授業の工夫を行い、学生に実体験をさせることで、学生の感性を引き出していきたい。そして何よりも教師（保育者）が自然に関心を持ち、心から楽しいと思える感覚を身に付けることが大切なのである。

【この他の幼稚園での活動例】…園内で行った自然と関わる活動の一部

※機会があれば、今後、この事例も詳しく伝えていきたいと考える。

- ♪つくしとり・よもぎ摘み・よもぎだんご作り・野いちご摘み・梅ジュース作り
- ♪さつまいもの料理（蒸かし芋・焼き芋・芋団子汁）
- ♪カレーパーティーの野菜作り（じゃがいも・玉ねぎ）
- ♪野菜スープ・豚汁・味噌汁など

【幼児が興味を示した図鑑や絵本】

「イモムシハンドブック」⁽⁹⁾「イモムシハンドブック1」⁽¹⁰⁾「イモムシハンドブック2」⁽¹¹⁾「しゃくとりむし かがくのとも」⁽¹²⁾等の図鑑や絵本も、虫の姿が写真や絵で忠実に描かれており、幼児に分かりやすく、良い教材である。幼児がすぐに調べられるよう、保育室に置いておきたい。

〈参考文献〉

(1) 学校教育法 第三章 幼稚園 第二十二条 第二十三条

(2) レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」 上遠恵子 訳 新潮社 1956

〈紹介文献〉

(3) 「チューリップ年少版こどものとも」 浅山英一 文 宮崎健夫 絵 福音館書店 1980

(4) 「チューリップ きゅうこんとたね かがくのとも」 山根悦子作 福音館書店 2022

(5) 「ヒヤシンス かがくのとも」 平山和子 文・絵 福音館書店 1970

(6) 「たんぽぽ かがくのとも」 平山和子 文・絵 福音館書店 1976

(7) 「つくし かがくのとも」 甲斐信枝 作 福音館書店 1997

(8) 「おおきなおおきなおいも」 市村久子原案 赤羽末吉 作・絵 福音館書店 1972

(9) 「イモムシハンドブック」 安田守 著 文一総合出版 2010

(10) 「イモムシハンドブック1」 安田守 著 文一総合出版 2012

(11) 「イモムシハンドブック2」 安田守 著 文一総合出版 2014

(12) 「しゃくとりむし かがくのとも」 吉谷明憲 作 福音館書店 2011

【資料1】【飼育・栽培】（福岡地区版）

- ◎ 幼児が無理なく育てられるものを挙げてみました。（教師の援助は必要です。）
- ◎ 苗はポットから「チョキ」（人差し指・中指）の指で取り出すと痛みません。
- ◎ 種の蒔き時・苗の植え時は、※印で知らせています。
- ◎ 植えてしばらくの間は、水やりを欠かさないようにします。

❁初夏

- 朝顔（種） ※5月
- トマト（苗） ※5月
- きゅうり（苗） ※5月
- 落花生（苗） ※5月
- すいか（苗） ※5月
- なすび（苗） ※5月
- かぼちゃ（種）（料理に使ったかぼちゃの種でも可） ※5月
- 枝豆（種） ※5月
- さつまいも（芋づる） ※6月10日前後

❁夏

- ◎ 花・野菜・さつま芋畑の水やり（草取りもします。）

❁秋～初冬

- 人参（種蒔き） ※9月
- ラディッシュ（種） ※いつでも可能（二十日大根と言いますが、20日では収穫できません。）
- ブロッコリー（苗） ※10月末（枝分かれして実るセニョールが良いようです。）
- チューリップ（球根） ※10月末～11月（近年は遅め）
- パンジー・ビオラ・ノースポール等（苗） ※10月末～11月
- スナック（スナック） えんどう・さやえんどう（苗） ※10月
- ヒヤシンス（水栽培・植木鉢・地植え） ※11月
- クロッカス・サフラン（水栽培・植木鉢・地植え） ※10月末～11月
- 玉ねぎ（苗） ※早生・晩生があり、用途に応じて選定！ ※11月

❁冬～春

- じゃがいも（種芋植え） ※2月…最近では3月も可（農協に確認済）
- ◎ 土づくり・肥料やり・水やり・支柱立て・草取り・花殻摘み・後始末などが大切です。
- ◎ もちろん、植物や栽培物への愛情も大切です！（毎日声をかけると、よく育ちます。）